白道のカミーノ便り

グアテマラ②

妻の不快指数は極限

国境の町は、ほこりの舞う小さな町だった。グアテマラへ渡る方法を尋ねていたら、大きな荷物を担いだ中年の夫婦が「帰るところだからついて来なさい」と言う。ちょっと不安そうなベアトリーチェの視線に気付かないふりをして、人の良さそうな夫婦についていくことに決めた。

ごみごみして強烈なにおいの市場の中に、看板も何も無い現地の人しか分からないような両替商がいて、グアテマラのお金を手に入れた。こってりと汚れがしみついたヨレヨレの札束だった。

市場を抜けると、そこは渡し場だった。船は無く、トラックのタイヤチューブでつないだ、いかだがたくさん浮かんでいる。長いさおで川底を押し、ゆっくりと進む。一瞬ののどかな船旅だった。

渡ったあと、パスポートに入国印を押すところはどこかと尋ねた。夫婦は「毎日買い出しに行くので、そんなものは無い方がいい」と言う。それもそうですね、しかし私たちには必要なんですが。「ずーっと離れた所に橋があり、そこにはスタンプを押す所があるかもしれない。とても遠い」

ベアトリーチェが「入国スタンプが無いと、空港から出国する時に面倒なことになる」と言った。

しかし、深夜バスに揺られて山岳地帯を越え、今朝たどり着いたばかりだ。一睡も出来ず軽い頭痛がする。再びタイヤのいかだで川を渡り、橋のある国境の町まで行く気力は残っていないが、戻らざるを得ないのだろうか。カピタン（隊長）とひそかに名付けているベアトリーチェの不快指数は極限に近い。

（つづく）

大きな器を頭にのせた市場にいた人＝筆者写す

橋本白道　佐賀県生まれ。京都で陶芸と出会い、備前で修業後、故郷に窯を開いた。スウェーデンやリトアニア、ドミニカ共和国に滞在し、ドキュメンタリー映画や陶芸学校づくりに挑戦した。2007年、美郷町上野の空き家に、リトアニア出身の陶芸家ベアトリーチェさんと夫婦で移住し陶芸工房を開いた。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。